

講演

自然に生きる術を考え直す：『森の経済学』をめぐる思索

齋藤暖生(東京大学演習林・樹芸研究所)

自己紹介

東京大学の演習林は7か所あり、その一番南にある樹芸研究所(伊豆半島の南の端)に今は勤務しています。アクセスが大変ですが、そこには温泉(入会的な温泉)があり、その共同浴場の周りで、地元の方々が時間を気にすることなくお話している光景を見て、豊かなところだと思いました。そういう豊かさが、今日の話にも関係してきます。

私の生まれは岩手県一戸町です。入会関係でいうと小繋のある町です。その後の育ちは盛岡市内で、それから滝沢で育ってきました。幼少の頃から、親に連れて行かれて山菜採りやキノコ採りをしたことがきっかけで、卒論の時から山菜・キノコ採りの研究を続けてまいりました。

今は広く括って、森林と文化の関わりについて研究しています。森林政策学の一部ですが、文化に着目しています。特に植物や菌類に関する民俗に一番強い関心があります。岩手にはずっと関わり続けており、2001年から当時の沢内村(現在の西和賀町)に入り続けています。今の町長の内記和彦さんに非常にお世話になってきました。

本日は、私と三俣と一緒に書いた『森の経済学』に関する話題を、とご依頼をいただきました。そこで、この本を書く裏側で考えていたこと、あるいは込めた思いなどをお話ししたいと思っています。

底流となっている先輩学者から受けた刺激や考え方をご紹介させていただくことで、よりこの本がよく理解できるようになると考えました。2人の共通の師である室田武の他に何人か紹介します。本日紹介できない先輩学者としては、三俣が直接に学恩を受けた宇沢弘文や、『コモンズの経済学』を書いた多辺田政弘がいます。そうした先輩方のエッセンスが詰まっているのがこの本だと思っています。今回は入会関係の方々もいらっしゃるなので、それに関連したお話もしたいと考えています。

1.はじめに

『森の経済学』は、実は難産で、構想について三俣と議論を重ね、目次ができるまで

一年半以上かかりました。その過程で、誰々がこんなこと言っていた、ということを引き出して、図にまとめたり、目次に組み入れたりする作業をしていました。

この議論の中で固まった本書の方針は次のようなものです。経済学から森を読み解くとか森と人々の営みを読み解くことはしたくない、それをやると森や人の営みを経済の論理に隷属させることになる。副タイトルを「森が森らしく、人が人らしくある」としましたが、そういう経済のあり方を打ち出そう、ということにしました。

出版社からの要望もあり、一般書としたことも特徴です。我々も一般書は大事だと思っており、手に取った一般の方々が日々の暮らしの中で、森との関わりに気づいたり、実践・行動に移すことができれば素晴らしい、という想いがありました。

2. 室田 武

三俣が「おわりに」で触れていますが、共通の師として室田武がいます。その影響はかなり色濃く、ほぼ全ての章に影響があったと言っても過言ではありません。よくご存知の方もいらっしゃると思いますが、室田武は有名なエコロジー経済学者です。三俣の大学院が同志社大学で、修士課程での指導教員が室田武でした。三俣は修士を修了後に、京大の博士課程に進学し、私と同室になりました。三俣によって引き合わせてもらい、フィールドワークも一緒にさせてもらいました。

室田さんと初めて本格的なフィールドワークをした福島の写真をお見せします。国有地下げ戻し運動が激しかった郡山で、この碑は引き戻し 50 周年記念碑、この山並みは石筵から撮ったものです。この研究会に何年か前にいらっしゃる後藤克己さんに、室田さんと一緒に会いました。

2001 年には、岩大演習林に来ていました。この写真は多分御明神演習林のトチノキの大木です。奇遇だなと思ったのが本のカバー写真、実は私が秩父で撮った写真でトチノキの大木です。非常に構図が似ているなど、室田さんと初めて来た岩手で見た光景と似ていたと、今頃になって気づきました。

室田さんは、残念ながら 2019 年に亡くなっています。彼は 1943 年生まれ、京大理学部物理学科を卒業していて、室田さんの経済学の基礎に物理学があります。物理学から経済がどうあるべきか、考えた人と言えるでしょう。

主著はいろいろありますが、特にこの本に関係してくるのは『エネルギーとエントロピーの経済学』で、1979 年の出版です。今読んでも、中身が全然色あせていません。1985

年に出た『雑木林の経済学』も挙げます。室田さんの論の軸の一つには、エントロピーという概念で説明される水土論あるいは物質循環論があります。人間も含めて全ての生き物が生きると、そこに廃物、廃熱が出ます。それが出るだけでは溜まってしまって、だんだん暮らせない世界、使えるものがなくなることが予想されます。

しかし現実はその通りではありません。生態系には微生物がいて廃物を分解したり、また使えるものになって物質が循環していくという営みがあります。水を通じて水の蒸発で熱が最終的には宇宙空間に出されます。そこで大事なものは土であり、土の中にいる微生物が分解した物質で植物が育って、それを動物が食べる、あるいは人間が食べることで物質はぐるぐる回ります。廃物だらけにならない世界があること、そしてこの循環を守らなければ人間に未来はないということを示しました。そのサイクルは小さなサイクルから大気圏のサイクルまで様々な規模が入れ子状にあります。このそれぞれのサイクルが十全に保持されることが人間なり地球の持続性を保つのだと論じていました。

もう一つの軸がエネルギー論です。特に強調していたのは今が石油文明だということでした。石油文明は石油という枯渇性資源に立脚しているということです。だからこそ、原子力の欺瞞をととも鋭く突いたのです。原子力は、「ウラン 1g で、石油 2 t に相当」と言われていました。しかし、ウラン 1g を得るには、何 t も採掘をして精錬する必要があります。ここで大量の石油を使うし、ウランを運ぶにも石油を使います。石油がなければできない技術だとして原子力新法を批判したのです。

自然エネルギーに対してもかなり鋭いメスを入れていました。当時は一部の自然エネルギーに疑問を呈していましたが、今の状況を見ると、ほとんどの自然エネルギー利用も石油文明の域を出ていません。

例えばメガソーラーが流行っていますが、太陽光パネルはかなり希少金属を使います。その希少金属を掘り当てるためにどれだけの石油を消費しているのか考える必要があります。石油がなくなったら太陽光発電はできません。こうした枯渇性資源に立脚した経済のあり方に疑問を呈していたのが室田さんです。だからこそ更新性のあるものに着目しようとしていました。枯渇性資源、特に石油について、どうしても日本は資源小国だという論調が出てきます。それを鋭く批判し、到達した結論として、日本の風土、水と土こそが富の基盤だとしました。だから全然資源小国ではないということです。

室田さんが大事にしたことに、小さなもの、小さな技術がありました。「更新エネルギーを最大限に活用し、エントロピーを過度に増やさないためには、この更新的地域の

空間範囲は、一定の下限に至るまで小さければ小さいほどよい」（『エネルギーとエントロピーの経済学』p.170）とっていました。

室田さんが示した同心円状の物質循環のサイクルで、小さなサイクルを回すのは共同体という単位であり、共同体は小さくていいとしました。規模の経済の良い面ばかり期待されていた時代ですが、規模の不経済を指摘しました。例えば、原子力発電という大きなシステムはこまめに止められないので、使っていないときの電気は、わざわざダムを作って、そこに水を揚げてまた発電する（揚水発電）という無駄なことをしています。

室田さんが今生きていれば、バイオマス発電を見て苦言を呈するでしょう。大規模な木質バイオマス発電では、木質ペレットの輸入が増えています。わざわざ海外から持ってきて燃やしています。電気に転換する際にはエネルギーロスがかなり生じます。これが廃熱ですが、熱は遠くに運べないから、大きな発電所で熱がたくさん発生しても使えません。規模の不経済です。小さなもの、小さな技術が大事で、森に関しては、薪ストーブ、炭焼き、水車、そして土壤微生物の利用を訴えていました。

もう一つ、室田さんが達した結論で、この研究会に関わる大事な点として、共同体、入会やコモンズが大事だと主張されていたことがあります。引用すると、「人間の生活がお互いの間の了解関係を通じて共同性の上に成立する範囲は、小川を単位とする広がりであろう。生態系はそこで一つのまとまりを形づくっている。そして、そこで人間の生活サイクルは、植物→動物→土壌を経て再び植物へもどる生態循環と一致する（後略）」（『エネルギーとエントロピーの経済学』p.60-61）のです。

小さな同心円の中心部、それを実際に行ってきたのが共同体や入会だということを示されていました。私が室田さんはすごいと思ったのが、経済学者でありながら、無料の価値を説いたことです。「無料であることは、無原則であることとはまったく意味が異なる。無料には無料であることの資源配分上の含意があるのであって、それは、共同体内におけるエネルギーと時間の更新性を保証する」（『エネルギーとエントロピーの経済学』p.173）のだと。もし有料にすると、お金を持った人が「これだけ欲しいから、よこせよ」ということもできて、それが資源の更新性を阻害するということです。

あの震災を経験した東北地方ではとても大事なことかと思いますが、「人間社会が土地や海を、だれのものでもないという意味で非所有であり、さしあたって地域共同体の共同活用場として認定することは、まず第一に不測の事態が発生したとき、それを人々の協力によって切り抜けるだけの柔軟性を共有の土地や海が与える、という意味で重要

である」(『エネルギーとエントロピーの経済学』p.173)と指摘しています。何かあったときに、ぱっと協力できる素地は、共同体があって、その共同で持っている山があるからです。そのような自然の中で人が生きていく上で重要な意味を持っていた入会や共同体の世界、これを「共」と規定したのが室田さんです。

室田さんは、「共」が圧殺されることを鋭く指摘して、是正を求めました。「共同体自治というすぐれた制度を改悪するには、私的占有をあからさまに宣伝するのも一つの方法であったが、それより巧妙な手段として、公有化、すなわち国有化へ移行することで『公共性』を強調し、共同体自治の実質的な破壊を、『公』=『共』という印象を、文字の上でつくりだすことで隠蔽するやり方もあった」(『エネルギーとエントロピーの経済学』p.192-193)。「近代化の諸過程は、『公』と『私』の世界の拡大強化によって、『共』の世界を圧殺する過程であった」としています。この辺りが『森の経済学』第7章で書いたことです。

室田さんと付き合っただけで気づいたことは、現場や、自分で汗をかくことを大事にしていたということです。ゼミ合宿、学生実習などにも同行しました。秩父演習林に勤めていたときに、学生に炭焼きをやらせて欲しいと来られたことがあります。炭焼きの世界ではとても有名な杉浦銀治さんを連れてきて学生と炭焼きをしました。そういう作業を通じて物事を考えてほしい、ということでした。だからこそ室田さんは実践もやり、本を書く上でも「一般書は大事だよ、一般書を書けるようになりなさい」とおっしゃっていました。「私たちの生活は森林とそれが育む水土の上に初めて成り立っているわけだが、(中略)政治や教育に過大な期待をかける前に、それぞれの人がとりあえずできるところから森林とのかかわりを回復することが肝要ではあるまいか」(『雑木林の経済学』p.58)と書いています。室田さんは『雑木林の経済学』という一般書を書いて行動に移すよう、考えるように促したのでしょう。

水土に根ざした論だけではなく、実際にみんなで行動することを室田さんは考えていました。水土に根ざした新しい文化技術の創造を目指す、ということです。

3.日高敏隆

その他にも私が受けた学恩について紹介します。まず動物行動学者の日高敏隆です。私が大学院生のころ、2003年頃から総合地球環境学研究所でアルバイトするようになり、初代所長の日高さんと会いました。日高さんが言っていたのが、「総合地球環境学研

究所は環境問題をやるどころだ。環境問題は突き詰めると、人間文化の問題だ。人間の文化をきちんと考えなければならない。むしろ文化を考えることがこの研究所の役割だ」ということでした。研究所の英語名は Research Institute for Humanity and Nature。ヒューマニティ、人間性を研究するという方向付けが示されています。

私がとても影響を受けたのは『動物という文化』です。本書は一つの思考実験で、全ての動物が文化を持っているという見方を示します。例えば単細胞の文化というのがあります。アメーバは細胞一つだけで、この中に食胞があったり核があったり全て収まっています。非常にシンプルで、エネルギー源は体表から取り込むという仕組みで生きている、そういう文化を持っています。自己複製は細胞分裂するだけで早く増えることができます。一方ですみかが限定され、体サイズが小さく限定されます。我々も含まれる、背骨のある文化では、背骨ができたことで脳を大きくすることができました。骨格があるので筋肉をつけて、移動の自由度が高くなりました。すると様々な環境に、自分に適したところに行くことができます。ただし、生き方が複雑になり、知能の発達が必要で、子供が生まれてから1人前になるまで時間を要します。背骨があるとコストがかかるという生きざま、文化になっている、という読み解きをしました。

日高さんがインスパイアを受けたと思われる本があります。これは日高さんが翻訳を手がけたドイツの生物学者ユクスキュルとクリサートの共著『生物から見た世界』です。ここで示された大事な概念が「環世界」です。

生き物の文化によってどれが必要で、どれが邪魔だという見え方が変わってきます。ハエにとって興味があるのは光であり、光に集まってきます。コップや皿には食べ物としての意味がありますが、それ以外是一緒であり、意味がありません。人間にとっては、飲み物、食べ物はそれぞれコップと皿で意味合いが違います。机は物を置くところという違う意味合いです。生き物によってそれぞれの文化があるので、見え方が変わってきます。生き物の視点での世界の見え方を捉えたのが環世界です。この考えは『森の経済学』の第1章の部分に盛り込まれています。

4.秋道智彌

次に生態人類学や民族生物学を専門とする秋道智彌です。秋道さんと出会ったのは、大学院時代で、コモンズ研究会という大学院生が主体となって企画している研究会に来てくれたのがきっかけでした。総合地球環境学研究所に彼がいて、研究プロジェクトの

アルバイトに雇ってもらったりしていました。博士課程を取った後は、研究員として拾ってもらいました。

秋道さんは先駆的なコモンズ論者の一人で、国際コモンズ学会で 1980 年代から発表しています。たくさん本を出しており、一番参考になるのは『なわばりの文化史』でしょう。『コモンズの人類学』も少し取り上げます。元々秋道さんは民族生物学に取り組んできた方で、本以外でも学ぶところは多かったです。民族生物学は端的に言うと、人と生物の関係性を解き明かそうとする学問です。人々が生物の特性をどのように認識して、その特性に応じてどのような対応をするのかという視点からアプローチします。よって、人間の認識と、生物に対応する行動や技術を読み解くのが民族生物学です。

秋道さんから大いに学んだことに、資源とは何かということがあります。『なわばりの文化史』には資源の三つの特徴が指摘されています。一つ目は、無主性で、元々誰のものでもないのが資源だということです。特定の個人または集団が有用・有益とみなし、利用することで初めて資源という形で立ち現れます。

次に何が資源になるのか、これは文化的、歴史的に変わります。したがって、第三の性格として誰がその資源を次に所有するのか、管理するのかも、また文化的、あるいは歴史的に決まってきます。人々が「これは有用だ」とみなして使い始め、これを未永くあるいはトラブルなく使っていこうとすると、そこでなわばりが生じます。個人のなわばりもありますが、歴史的に見ると、多くの場合は複数の人たち、主に共同体という単位でなわばりを形成しました。それを論じるのが秋道さんのコモンズ論です。つまりコモンズは人々のなわばりだということです。そのなわばりを巡って、共同体では様々なしきたりを作ってきました。それは地域の文化や歴史に根ざすものであり、その土地や生き物の特性に応じて慣行ができてきました。それが入会であり、口開けとか口留めは、その生き物が例えば産卵するとか、種を飛ばすとかいうタイミングも考えられていました。

なわばりが持つ意味について秋道さんの論で非常に特徴的なのが、聖域としての「カミの領域」というなわばりもあるということでした。聖域は、今ではサンクチュアリと呼ばれて保護制度となっているのでピンとくる方もいると思います。しかし、人間のためだけに設定するのがなわばりではないというのが秋道さんの卓見だと思います。

『コモンズの人類学』には「人間はすべての空間や財を、私有にしる公有にしる『私物化』しているのではなく、自然やカミの領域を持っているし、またそのような社会を

持続しているのである」(『コモンズの人類学』p.220)と書かれています。これは非常に深く、『森の経済学』では第1章の章末の問いの部分で取り上げました。

5. 篠原 徹

最後は篠原徹です。私が大学院生時代、国立歴史民俗博物館にお勤めでしたが、「いろいろ教えてください」と押しかけて行ってからの付き合いです。

民俗学の中でも環境民俗学が専門であり、主著としては『海と山の民俗自然誌』や『民俗の技術』(編集)があります。篠原さんは民俗の技術に特化した研究をしており、自然の中で生きる人々が、生身のまま自然と対峙しているだけではなく、そこに必ず技術、技があるから生きていけることを示しました。例えば、『海と山の民俗自然誌』では「漁師がなぜ、指標もない大海原での確に漁場を探し当て、獲ってこられるのか」その民俗の技術を明らかにしました。今だとGPSがあるから獲れたところでポイントを打てばいいだけですが、そういう技術がない時代は、ヤマアテ(山当て)という人々の知恵が詰まった方法で場所を特定していました。

篠原さんが言う広義の技術は道具+技能です。自然と付き合う上での技術は、例えば釣りのように道具が素朴であることが多く、特に技能の部分が大事だとしています。素朴な道具をどう使うのか、コツみたいなものが技能であり、ただの頭の知識だけではなく、体が覚えている身体知も重要だということです。加えて、魚はどういう反応をするのか、生き物の習性、環境に関する自然知、それらが複合されて、単純な道具ですごいことをやってのける、ということを示しました。

篠原さんの着想や考え方が刷り込まれて、『森の経済学』では、人はどういう技術で森と向き合ってきたのかということを考えてみました。一方、篠原さんは実はコモンズがあまり好きではありませんでした。「お前なあ、コモンズなんか言うとならあかんで」と言われていました。集団も大事だとわかっている中で、おそらく個に宿る技術、個の能力が隠されてしまうのを危惧されていたのでしょう。

6. 本書が目指そうとしていたことと限界

ここから『森の経済学』の解説として、私が大事に思っていることを紹介します。

第1章で示した図は、日高さんの物的な物の見方であり、元図はジンマーマンという地理学者のものです。自然、周りにあるものは本来、価値は中立で良いも悪いもない、その

中であるものは資源、役に立つとされます。我々の文化があつて役に立つとわかっているから資源とみなされます。一方、森のことを考える上で、その脅威の部分もきちんとみておかなければいけません。マイナスと捉えられる部分もあり、これも文化によって決まってきます。言ってみれば、これは人間にとっての環世界で、文化を通して環世界が生まれているということです。

秋道さんなりに言うと、文化は地域や集団、あるいは個人によって変わってきます。もちろん人間共通の文化もありますが、固有の文化もあつて、世界の見え方、つまり環世界は、実は1人1人違うのではないのでしょうか。価値観、例えば欲望、知識・技術によって見え方が変わってきます。例えば今、木材の使い方でセルロース・ナノファイバーが出てきました。この使い方が定着すると、太くて通直な木でなくても、曲がっていてもとにかくあればいい、となり資源の見え方が変わってくるでしょう。今まで資源でなかったものが資源になってきます。

最近の危惧として、日本人にとっての森は中立的事物の部分が大きくなってきているのではないかということがあります。森との関わりが減り、文化の部分がしぼんでいっているようです。山の景色を見たとき、森ですれね緑ですれねという見方しかできない場合が多いのではないのでしょうか。例えば、人工林や広葉樹を区別したりして山を眺めることは稀に思います。そういう点で文化は大事で、今日の朝日新聞のコラムで書かせていただいたのはまさにそういうところです。身近にあるものを特別にする例が、お盆の晴れの食だと僕は思います。それをできるのが文化です。多くの人にとっては、森がただあるだけで資源でもないし脅威でもないかもしれません。でも、やはり人がここで生きていくためには、それに何か価値を見つけることはとても大事です。価値が見つけられなくなると、自然がただの自然になってしまいます。

この本で力を入れたのは、商品化経済を相対化することでした（第2章）。まず、1人だけの経済のモデルで、1人でも経済があることを確認しました。次に少し複雑になってくる共同体の経済モデルで、協力や自然への働きかけの経済関係が成立していることをみました。この段階まで貨幣がないけれども経済が回っています。今我々が住んでいる世界は市場があり、そこで違う共同体や個人が市場を通じて取引をします。むしろ市場が肥大化して、ここだけが経済だと見られているくらいがあります。言い換えれば市場のために森や共同体、人間を従属させるということが起きているのではないのでしょうか。森と人の経済は、今の時代も市場を介さないやり取りにもっと目が向けられていい

はずです。非貨幣商品化経済というのが、森の世界にあっていいでしょう。

この第2章で共同体の経済の例として旧沢内村のことを書きました。そこでは山菜やキノコを採っており、これらはご馳走です。そして、それを採りに行くことは誇りのある遊びになっています。ご馳走だから採ってきて人にあげたら喜ばれる、だからいいものを採ろうとします。人にあげると「いいもの採ってきたのね。どこで採ってきたの」などと話の種になります。おばあちゃんたちは、料理したものをあげたりします。「よく作ったな。どうやったんだ」というような情報交換をしたりして話が弾みます。そうして互酬、贈与、交換が行われる中で「よし次もっといいものを」と人の技が高められます。一般に財やサービスの質は市場での競争を通じて上がるとされますが、非貨幣経済の中でも財やサービスの質が上がって、暮らしを豊かにすることは可能だと言えます。

人が森と向き合う技術を第5章で書きました。意識したのが、木は我々が相手する生き物として特殊だということです。スケールが全然違います。樹木は体サイズが人より断然大きく、生活史のサイクルも長いです。生身の人間では対応できず、必ず技術が介在します。もう一つのやり方として共同や分業があります。前者の技術を介してというところは、樹木を育てる技術、木材を使う技術という観点でまとめました。

樹木を育てる技術は、ドメスティケーションあるいは馴化（植物であれば栽培、動物であれば飼育・養殖）の一つと言えます。農作物と比較すると、樹木栽培の歴史はとても浅いです。農作物は大体1万年と推定され、樹木のほうは、日本が多分一番古い部類だと思いますが、400年500年というレベルです。つまり桁が二つ違うぐらいに歴史が浅いのです。農作物がドメスティケートしやすかったのは、基本的に1年生草本を相手にしているからでしょう。樹木は何十年、あるいは100年以上生きる生物なので、それをドメスティケートする対象とはしにくいです。これが遅れた理由として挙げられるでしょう。その中で選ばれたのがスギやヒノキです。

民族生物学的に説明するならば、スギ・ヒノキは、まずほかの木と樹形が全然違います。幹が通直で、対照として広葉樹のケヤキを示すと、材を取る効率が全然違います。それから昔の技術では、割れやすいことも大事です。素朴な技術では、スギやヒノキの割裂性が高いことが好まれます。そうでない木は、のこぎりが無い時代は使いにくかったと考えられます。木材が軽いこともスギやヒノキが好まれた理由でしょう。

輸入学問の影響もあり、区画輪伐法という、植えた後下刈りと間伐をして育てて、伐期が来たら伐採するというやり方が定着しました。こういった一斉林を作るやり方を編

み出して、何回転かしているところもありますが、先ほどの栽培の技術史を考えると未熟な技術と考えた方がいいのではないかと、少し書きました。これは風土に抗う技術だということです。この高温多湿で、いろいろな植物が繁茂してくるような日本において、こういうやり方はまだ考えるところがあるかもしれません。

木材を使う技術については、最近、木材はなるべく細かくしてから再合成するということが主流になってきています。その極致がセルロース・ナノファイバーなどです。木材は元々生き物なので個性がバラバラで、乾燥過程で木材が暴れたりもします。不均質な性質を持っているものを均質にするように、木材を扱う技術が発展してきたと捉えることができます。均質な素材は工業的に利用するのに適しています。室田さん的には、これはもう石油文明の賜物というような見方もできるかと思います。

第2章に載せた江戸名所図会の図ですが、非常に示唆に富んでいます。日本橋にたくさん舟が行きかっており、舟はスギでできていたでしょう。おそらく江戸時代に植える技術が発展して、こうやって使われてきたものでしょう。それから、この上に載っている樽もおそらくスギが使われています。スギを選んで植えて、それを加工して使ったということです。樽を作るには割る、剥ぐという加工をして、後は結うという技術があります。液体を入れる容器は、その前の時代は瓶や壺だったので、流通にはあまり適しません。樽のように軽い容器を導入することによって、酒などが流通し高度な経済社会が実現していました。それを森が支えていたことを象徴する絵で、人口3,000万人がそれなりに豊かな暮らしをできていた証左でしょう。

第8章は日本の森の資源が使われなくなっている過少利用を取り上げました。注意したいのは、過少利用は過剰利用の裏返しだということです。国単位でいうと確かに森林の過少利用がありますが、グローバルな視点では、資源の過剰利用があります。グローバルに資源を使いまくっているから、身近にあるものを使わずに済んでいます。石油のエネルギーに依存しているから可能なことです。近くのものを使わないということは、遠くのものに頼っているということです。例えば木材、先ほど言った木質バイオマス発電でペレットを輸入するのも、このような感じですか。

さらに言うと、食に関してもそうです。たとえばハンバーガー屋のフライドポテトやコンビニの唐揚げが安くて手軽に食べられるのは、揚げ油が安いからでもあります。パーム油です。このポテトフライ美味しいね、と言っているのが実は熱帯雨林のアブラヤシ・プランテーションに繋がっており、つまり過剰利用をそこでも起こしている可能性があ

ります。こうした問題に気づいてほしいと思います。第1章で森には脅威という側面もあると述べました。森との関わりが減ると、そもそも見えない、わからなくなる、つまり脅威にも対応できなくなるので、まずいことでしょう。

おわりに、この本は一般書として書きました。室田さんもとても強調していたように、とても大事なことだと思っています。人々は「私」の立場であれ、「公」の立場であれ、「共」の立場であれ、森の経済の主体、自分が森の経済を作っていく主体になれる。主体になることへのいざないが必要です。高度に発達したシステム、あるいは技術にも目を向けて欲しいです。とても長いサプライチェーンがあって、安いもの便利なものを手に入れていることは奇跡的です。その長いチェーンを確かなものに行っているのがまさにシステムや技術です。

これは、技術が担保する確かさです。あまりにも便利なものだから、我々はそのシステムや技術に依存しきっているのではないのでしょうか。依存すると、人間が元々持っていた能力、技能や知識が退化します。それまで自分らでできていたものが、そのシステムや技術が代替してくれるから、自分の能力は捨てていきます。しかし、そのシステムや技術は、今は確かでも、機能しなくなるときがあるのではないのでしょうか。

例えば震災も、ウクライナ危機もそういう側面がありました。人間が本来持っていた能力を捨ててしまってから、システムや技術が機能しなくなったとき、どうするかは大きな問題です。本当にこの国土で生きていけるのか。そういったときに、生身の人間が自然から恵みを得る能力も持っていることは、そこで生きていける確かさを保障することであり、その能力を育むものが森や自然と直接触れ合う機会ではないのでしょうか。この本の最終章では自由に自然にふれあえることの大事さを述べました。そういったところから森と付き合う技術や文化、その先にある経済が形作られていくのではないのでしょうか。それを期待して本書を書きました。ありがとうございました。